

「……そーいやさ、スピリットくん。ウチの家にもいくつ  
か、転がってたよな気がするんだよね」

「は？ ナニがですか」

「魔道具」

「!?」

その日。死武専の回収した魔道具について、記録資料の  
編纂を行うべきだという話が、教職員会議で浮上したばかり  
のことであった。それは着実に死武専の保管庫を圧迫し  
つつある魔道具の、検品と整理分類を兼ねて、の意味もあ  
ったのだが、ああそういえば、とまるで明日の天気でも話  
すような口調でとんでもないことを呟いた死神様に、場の  
職員達は凍りついた。

「……はア？ 家……ってまさか、死刑台邸っすか」

「うん。……いや、だーいぶ前に魔女から取り上げ  
たヤツ？ そういえばどこやったかなあって」

「ちよっ……、そんな大事なことを、なんで今頃になっ  
て！」

「だって、今思い出したんだもの」

考えあぐねた末に言い、困惑気味に首を傾げる死神様に、  
デスサイズは頭痛を覚えこめかみのあたりを抑えた。デ  
ス・シティーの、所謂ブラックボックスのひとつ、死刑台  
邸だ。そんな事があっても決して不思議ではない。

「……あそこは！ キッドだけならともかくリズもパテ  
イも、てかいまは一般の生徒だって出入りさせてる場所だ  
しよーが？」

「まアまア落ち着いて、そー怒らないでったら」

なにせあの頃は死武専も今よりずっと手狭だったしね  
え、とのんびりした口調で語る死神様をよそに、緊急議  
題として持ち上がった『死刑台邸の倉庫整理』は、可及的  
速やかに議決されたのだった。

\* \* \*

「で？ ……コレが、その？」

「うむ。父上に『倉庫に魔道具が転がってたかもだから、危ないしちよつと確認お願い』と言われて、……思い出しただ」

死刑台邸の、物置部屋というには広すぎる収納庫の奥深くから発掘され、一時退避させてきたのだというそれらは、死神様から依頼された魔道具……ではなく。

数々の『ラブライフサポートグッズ』——所謂、大人のオモチャと呼ばれるものだ。ずらりと並んだ『玩具』を前にして、二人の若い恋人はなんとも言えない顔で向かい合っていた。

「……………そういや、あつたな、こんなん」

二人にとつてはある意味、魔道具よりもよほど、表に出してはいけないものであるのは間違いないかった。しばしの沈黙の後、僅かな懐旧と、それを上回る呆れとを含んだ声でソウルが述べ、何かを含ませた視線で、向かいに座るキッドをちらりと見た。これらは全て、彼が用意したものだ、と言って誰が信じるだろう。そういった性愛の方面については、未だに決して明るいとは言えないキッドが、

だ。

「ワケもわかんねーで、なんか色々買いこんでたっけな？」  
「……仕方がなからう。たとえ詳しい用途が分からずとも数を揃えればより確固たる、……その。サポート、に、…なるよ、思ったんだ」

拗ねたような表情で、僅かに頬を染めるキッドの言い分に、ソウルは小さく苦笑を返した。それはただ抱き合えば何とかなると思っていた、『初めて』の時のほろ苦い思い出に。そして思うようには上手くいかなかったその時の事を、彼なりに気に病んでの行動に。

恋人の直情傾向が、妙な行動力へと繋がる場合がままあるということ、短くはない付き合いの中でソウルも重々理解していた。キッドなりに熟考した上での行動の結果は、いつもどこかの外れで、極端で、でもだからこそ、その真摯な姿勢を好ましく、そして愛おしくも感じるのだと。

——そんなことを、素直に口に出すには少し照れくさかったし、これ以上昔話を持ち出して話を拗らせるのも面倒で、ソウルは甘酸っぱくほろ苦い思い出を記憶の抽斗へと、そつと仕舞っておくことにした。

「……ま、あん時やとてもじゃねーけど、こんなん使う余裕なかつたっつーか……」

マカが不在で本当に良かった、と思いつながら、ソウルは自らの銀髪を掻いた。互いの恋愛について、不干渉協定を結んでいるパートナーは、しかし父親の影響もあるのだろう、それこそキッド以上に、こと恋愛と性愛については潔癖で堅物だ。こんなものを見られようものなら、当分口を聞いてもらえまい。どころか下手をするとパートナー解消にまで話が至りかねない。

キッドと入れ違いに、出ていった彼女は今頃は、件の死刑台邸でパジャマパーティーだ。だからこそこうして、ソウルは相応の下心をもって、恋人を自らのアパートへと招いたわけではあるのだが。

出鼻を挫かれると言うのか、いきなり一足とびにハイレベルな話題を振られて逆に、疚しい思いが霧散してしまっただけはある。つかどうやって使うんだコレ、といくつかの『玩具』を手にとっては興味深そうに眺めるソウルと差し向かいで、キッドは真剣な顔でその『玩具』の山を見詰めていた。

「これは、どのようにして処分するべきだと思う、ソウル」  
「あ？ ……ああ」

そのまま捨ててしまっているものかどうか、という相談をしたかったのだろう。確かに、ゴミ袋につめてそのままポイ、と処分してしまっても大丈夫な類のものなのか、疑問は残る。

何より、うっかり中身を見られたりしようものならば。  
（……冗談じゃなく魂狩られつかも……）

思わず乾いた笑いを零して、箱を一つ手にしたソウルは、しっかし、と呟く。

「ちよびつと勿体ねーよなア。封も切つてねーのに」

「ふ……む」

道具とは、使われるために生み出されたものだ。用途も分からず購入したものだとはいえ、その使命を果たすことのないまま廃棄されようとしている『玩具』を、見詰めるキッドの眼に微かな躊躇が浮かんだのを目ざとく見て取って、ソウルはその口角を引きあげた。

それはまるで、………悪戯を思いついた時のような、そんな笑みだった。

どうせ廃棄してしまうのなら。

その前に少し試してみないか、と。

言ったソウルの言葉の意図を、深く考えなかったのは恋人に対する信頼と同時に、そういった性具に対する無知からくるものでもあった。

「ん……………なんだ？ まだシャツが……………仕方がないな。こうか？ それで、どうするんだ？ ………………足？」

「そ、手エこつちに、……………んーでコレを……………」

ぺたりと尻をついた状態のまま、ソウルの指示通りに膝を開く。少し後ろへ伸ばした両手首に、両足首が繋がれる。注意深く装着された枷を、珍しいものを見るような目でキッドは眺め、「……………ふむ」と小さく呟いた。

なめた皮でできたその拘束具は、皮膚を傷つけぬよう配慮されているのだろう、肌あたりは滑らかで柔らかい。

軽く力を入れた程度では、解けぬように連結された自分の手首と足首を、しばし観察していたキッドは、「それで？」とソウルを振り返った。

「これは、……………拘束具か？ どう使うものなんだ？」

「今まさに実践してただけども？」

呆れたように言ってソウルは、説明書と空になった箱とをぼいとベッドの脇へ放り投げ、自らの施した拘束を確かめるようキッドの肢体を眺めたあと、「……………やつべ」と呟いて口元を軽く抑えた。

黒い革製の手枷と足枷。所謂、簡易的な緊縛のためのものだ。専用の金具によつて連結されたそれらは、座して開脚した状態で、膝を閉じることができぬようキッドの身体を縛めている。

セクシャルなプレイとしての緊縛に、ソウルは格別興味があるほうではなかったが、身体の自由を奪う事で生まれるのは物理的な優位性だけではなく、精神的な征服感の方が比重が重いのだということに気付かされる。ハードな印象の黒革が肌の白さを際立たせ、なにか倒錯的な美しささえ感じられて、ソウルは思わず唾を呑んだ。

「なんか、……………ヘンな趣味に目覚めそ」

「なにがやばいのかは知らんが、だつたら早く外してくれ」  
少し興奮したような様子を見せるソウルに、キッドは怪訝な顔で眉を顰める。痛みこそないものの、体の自由が利かないというのはあまり気分の良いものではなかった。

なにより、とキッドは今の自分の姿を確認するように視線を下げる。肌蹶たシャツを一枚羽織つたのみで、他は何も身に着けてはいない。いまさら肌を隠すような仲ではないが、あられもない姿を晒すことに、まったく抵抗がないわけでもない。膝を開かれた状態で、隠すことも出来ぬ恥部を、それでもどうにか隠そうとして身じろぎした拍子に、ちやらりと金具の擦れる音がする。

いつそ全て脱ぎ去ってしまえば、羞恥を覚えることもないのかもしれないが。一枚といえど、衣服というある種の象徴、日常と非日常をわけけるものでもあるそれを、纏つたままの性交に、抵抗を覚えるところは少しあった。

「……………ソウル」

「まアまアまア」

「お、」

「いいからいいから」

「……………う、ん……………」

抗議の言葉を、音にする前にキッドの唇は塞がれた。何か言おうとするたびそうやって、見計らつたかのように降ってくるキス。舌を絡め取られ、優しく吸い上げられると自然と吐息が零れ、言おうとした台詞も全て、空気に溶けるように淡く消えてしまう。

浅く、時に深く、また浅く。繰り返されるキスを受け止めながら、いつもこうなるんだ、とキッドは思う。雰囲気流されるといふのだろうか。口づけを交わしてしまえば甘く深い陶酔が心中を満たし、触れる指先の感触が胸の甘い疼きをさらに強めてゆく。血のように鮮やかな赤をした瞳に見詰められると、どうしたことか身体からは抵抗の意思が奪われてしまい、結局はいつもソウルの主導のままに物事は運ばれているような気がするのだ。

「……………しかし、」

ふわふわとたゆたいはじめた意識の片隅で、思う。手足は拘束されたままだ。こんな、抱き合う事もままならぬ状態で、どうやって愛しあおうというのだろう、か――

「んっ………?!」

不意に冷たいなにかが、敏感な箇所に触れて、キッドはびくりと身体を竦ませた。

「んう、……………つく、」

とろとろと、粘度の高い液体が、性器をつたっている。潤滑剤を、ボトルから直接垂らされたのだ、と気付いた。ばた、ばた、と滴がシートに落ちて染みを作る。太腿までを濡らしていく粘液の感触が少し不快で、ちろりとソウルを睨み上げると、彼はニイと楽しげに口角を引きあげた。

「ん? ……冷たかった?」

恐らく、反応を楽しんでいるのだろう。問いかけるソウルの声音が軽い。わかっているくせに、そう言おうとして、けれどキッドは言葉を飲み込み、代わりに唇からは、小さな喘ぎのような声が洩れた。陰部を軽く撫でるように触れた指先が、纏わりついたローションを馴染ませるように、後孔の周囲を優しく愛撫しはじめる。

「んっ、ああ、……………あ、」

ほどなくして、ぬるりと指が体内へ滑りこむ感覚に、伏せた臉が軽く震えた。さほどの抵抗もなくソウルの指を受

けいれ、異物感に少しだけ眉を寄せたキッドはやがて、探るようにゆっくりと、内壁を擦る指先に、体内を押し掘げていくその動きに、苦しさだけでなく艶の混じった吐息をついた。

\* \* \*

体内で、蠢く二本の指が敏感な性感帯を掠める度に、キッドは軽く身を震わせた。しかしそのまま絶頂へと到る快感を与えるでなく、ソウルは先程から、ゆるゆるとそこを解しているだけだ。

「……………ソウ……………ル、」

呼ぶ声に、焦れたような色が滲んだ事を自覚して、既に上気していたキッドの頬は、さらに赤みを増した。

やがて指を引き抜かれ、零した吐息は既に熱く湿ってい

た。強請るようにソウルに顔を寄せ、口づけを交わす。唇で頬を辿り、耳朶を軽く甘噛みすると、ソウルは軽く首を竦め、小さく笑みを浮かべた。

「焦んなって」

キッドを留めるように軽く身体を押し、身を離す。肩をかしを食わされたような顔をするキッドをよそに、ソウルはベッドサイドへと手を伸ばした。

「……コッチもさ、ちよつと気になったんだよな」

「なんだ……それは」

「んーなんか、ドイツ製？ だつてよ」

舶来モンだな、などと言うソウルの、手にある黒いシリコン製のその物体は、先程すらりと並べていたアダルトグッズのうちの一つだ。両の掌に納まる程度のそれは、まずその不可思議な形状に目がいく。変則的なS字型が、まるで蛇のようにも見えて、キッドは訝しげな顔をした。

「……………挿れるのか？」

男性器を忠実に横したような、デイルドと呼ばれるものとは少し異なって見えたが、しかし性具であることに変わりはない。何に使うものなのか、ということに考えを巡ら

せたキッドは、恐らく体内へ挿入することで快感を得るものなのだろう、と読み取ったが、果たして予想は的中した。

「やだ？」

「……………、……………」

子供じみた好奇心がそうさせるのか、妙に乗り気な様子の恋人に、良いとも嫌だとも言えず、キッドは困ったような顔で眉を寄せた。進んで試してみたいとは決して思えなかつたが、請うように瞳を覗きこまれ、腰を引き寄せられると、なし崩し的に許してしまわざるを得なかつた。

「っあ、……あ、」

挿入部を、押し当てられてキッドの身体が強張る。「力抜けよ」と低い声で囁かれて、キッドは観念したように長い息を吐いた。いつもソウルを受け容れる時のよう、意識的に身体を弛緩させる。もう十分すぎるほどに慣らされたそこが、ローションの滑りも手伝つて、まるで自ら望むかのように、異物を呑みこんでゆくのがわかる。

「う、——は、あ、っん」

ゆっくりりと、慎重に性具を埋め込んでゆくソウルの、肩に額を押しあてる。本当は、その肩に縋りつきたかつたが、

手足を縛められていてはそれも叶わず、ぐつと拳を握って体内へと侵入してくる違和感に耐えた。

は、は、と短い呼吸を繰り返す。人の性器とよく似た、しかし明らかに異なる感触に、身体を微かに震わせながらそれを全て受けいれて、キッドは大きく背中を上下させ、ゆっくりと息を吐いた。

「……………どんなカンジ？」

「どんな……………と、言われて、も」

興味深げに顔を覗きこむソウルに、言葉を濁し、俯く。上質なシリコンは身体に馴染みやすくできており、人体工学に基づいた極めて機能的な形状のおかげか、痛みを齎すこともない。寧ろ、性感帯を的確に捉えるよう設計されたその器具が、体内で敏感な箇所を、圧迫し刺激しているのが分かる。

しかし、下腹部にじわりと波のように広がる、快感の前触れよりも、生身ではないものを体内へ受け容れている、という生理的な不快感が上回る。得体のしれない気持ちの悪さを、うまく言葉にできずキッドは表情を曇らせた。

「痛エ？」

「痛みは、ない、が……………あつ、んんん、う、……………うあ……………  
……………つや、あ」

思わず声が漏れた。ぐぐ、と押し上げられると中だけでなく、外側が会陰部のあたりを刺激する。違和感が、じわと快感に変わりつつあるのが分かる。

そうやって、意思とは関係なく従順に、与えられる刺激を快感として受け容れようとする自らの身体が、いつもながらぞら恐ろしくさえ感じる時がある。

まるで、つくり変えられてしまったかのようだ、と。

じわじわと、腰から背骨を這い上ってこようとする愉悦に、あがりそうになる声を必死に噛み殺しながら、そんな事を思う。

「……………つ、……………う、…………………………つく、」

身も心も、流れに委ねてしまえばもっと、楽になれる。そう分かっているにも、抗わずにいられないのは、そうやって変えられていくことへの戸惑いと恐れ、そしてささやかな反発心から来るものであったが。

「あ、ああ、……………ああつ」

徐々に、吐息が色めいてゆく。時おり与えられる突き上





り楽しみに笑った。

「……すっげ。そんなに、イイ？」

「止、め！……！　っ、う、んっ」

もう止せという言葉葉を、封じるように口づけたソウルの指が、すと脇腹を撫であげる。そんな些細な接触にさえキッドは身体を大仰に波打たせた。

「なんかさ。偶にはじっくり見たいと、思って」

囁いて、ちゅっとうと耳朶に口づける。ソウルの手は、腰のあたりを軽く支えるのみで、積極的に身体に触れてはこない。恋人の温もりを感じられない、その事が余計に、キッドの不安を煽っていた。

「……………？　なに、がっ、……だ、——あ、やう」

「お前が気持ち良くなってるトコ」

「なん、……………」

ソウルが何を言っているのか、キッドには理解ができなかった。何を、見たいというのか。このように拘束を施し、自分のみ快楽を与えて、彼の何が、満たされるといいうのだろうか。疑問と戸惑いで満ちた思考は、しかしすぐに途切れることになった。

「ん、んんんっ……！　あ、あ、やあ、」

粘度の高いローションでとろけている中を、かき混ぜるように動かれて、どうしようもない苦しさを覚え身を揺する。けれど体内の機械は動きを緩めることは無い。ある程度の流れを読んで、加減と緩急をつけるような、いつものセックスとは違う。正しく機械的に、正確にそれは自らの使命を全うするため動き続け、快楽だけを叩きつけてくるのだ。

「はっ、あああ、ああっ！　あ、ああっ……ひ、う」

だらしなく開いた口からは絶え間なく嬌声が零れ落ちる。強い快感に素直に反応する身体とは裏腹に、精神がついていけなくなっていく。動かすこともままならぬ身体を、懸命に藻掻かせようとするが、それすら出来ず今の状態では、身じろぎ程度が限界だった。

四肢を振り乱すことができれば、どれだけ楽になれただろう。動けない、ということは、啞えこんだ器具の与える動きを、誤魔化すこともできず全て、受け止めなければいけないということだ。そう気付き、キッドは漸く、ソウルが自らの手足を拘束した意図を知った。

「あつ、ああつ、あつああつ！」

唯一自由になる喉で、必死に声を張り上げる。どうにか身を揺すり、出来るだけ刺激を減らそうとしても、縛められた身体はどうにもできない。ただなす術もなく身体を暴力的に拓く快楽を、キッドは受け容れ続けるしかなかった。

「あ——あ、嫌、だ、や、ああつ、……つく、あ、」

見ている。見られている。そう意識すると余計に、抵抗感が増した。せめてソウルの目から逃れたかった。彼の見える前で、彼ではないものに、身体を蹂躪されそして為す術もなく快感に溺れていくことへの、強い羞恥がキッドを襲う。

それはまるで、快楽と引き換えに、誇りを奪われているかのようで。

「……ソソるな、その顔」

そんな痴態を楽しむように、愛おしむように見詰められて、名を呼ぼうとしても声が出ない。代わりに唇から零れるのは、甘く濁った嬌声だけだ。

「な、キッド。——我慢、すんなよ」

理性を突き崩すような、ソウルの声が思考を痺れさせる。弱々しく首を振った拍子に、涙が頬を伝う。それが生理的なものであるのか、それともそうではないのか、キッドにはもうよく分からなかった。

「見せて、全部」

俺だけに、と。甘い吐息のように、囁いたソウルの瞳がスツと細まった。その赤を、視界に映したのを最後にして、キッドは脳裡が真っ白に染まり、ちかちかと激しく明滅するような感覚を味わった。

「ふああつ！ あ、あ、……ア、あああ、や、ア、あは、あああ——っ……」

顎を仰げ反らし四肢を強く痙攣させる。しかし潤滑剤と先走りの滴でとろりと濡れた性器からは、欲の滾りが吐き出されることはなかった。吐精を伴わぬ激しい絶頂感に、キッドは一際高い声で啼いたあと、糸が切れたようにガクンと項垂れた。

余韻に身をわななかせながら、キッドは荒い呼吸を繰り返した。涙と涎が顎をつたい、喉元までをべったりと汚し

ている。熱く火照る身体の中で、そこだけがひやりと冷たかった。

ソウルが操作をしたのか、体内の器具は既にその動きを止めていた。覚めやらぬ快感の余波に、しばらく肩で息をしていたキッドは、やがてゆらりと顔を上げ、少しばかり恨みがましい色を宿した上目遣いで、ソウルを見上げた。

「も……いい、だろ………、こんな、」

「ん」

息も絶え絶えに言うキッドに応じて、腰にまわされていたソウルの手が、そのまま背骨の下の窪みをつたい下りる。すべらかな尻を撫でる指先に、反射的に身体がピクンと跳ねた。

「……ソウ、………っは、あ」

ずるりと身体から異物を引き抜かれる感覚に、堪え切れぬ声が唇から微かに零れた。断続的に吐く息の熱さが自分でも感じられる。絶頂の後の気怠い痺れは、退かず未だ持続している。ずる、る、ると性具が抜け出ていくのが生々しく感じられ、キッドは金の瞳を斜めに伏せた。長い睫毛が震えていた。身体の芯で、まだ種火のように燦っている

何かから、意識を反らしたくて。手足を伸ばそうとして、身体の動きを阻害されたことで、キッドは自分がまだ、拘束具を身につけた状態であったことを漸く思い出した。

「………、」

外してくれと、言おうとして唇から零れたのは掠れた溜息のような音だけだった。目で訴えれば、ソウルは黙ってキッドの腕を取り、引き寄せる。言葉にせずとも、意図は伝わったのだと思った。けれど拘束を、緩めるものだとばかり思っていたソウルの手には、そのまま身体を強く引かれ、キッドは思わず声を飲んだ。

「！」

視界がぐらりと傾いた。縛められた身体は簡単にバランスを失い、胸からシートに沈む。手足は連結されたままだったから、自然と腰を突き出すような格好になった。

そのことを恥じ入るより先に、背中から覆い被さるようにして身体を重ねられ、キッドは彼の行動の意味を察して、声を荒げた。

「………、ソウル！」

「分かってるって」

息を吹き込むかのように、耳元で囁く。ざわりと背をつたう甘い感覚に、思わず身体が強張った。そんなキッドを見透かしたように、低い声は続ける。

「……………続き、して欲しいんだろ？」

「……………」

言葉を紡ぐより早く。身体から、力が抜ける。背に感じるソウルの体温に、押し当てられた欲望の熱さに、理性より情慾が素直に反応していた。振り払う事はできない。それが拘束具の所為だけではないと、気付かない振りをする。それは明らかに、彼自身の意志だった。

肩越しに振り返る、潤みきつて蕩けた金色の瞳が、僅かな迷いさえ捨てて恋人を見詰め、そして。

黒髪を微かに揺らして、頷いたキッドに、ソウルは声を立てず小さく笑った。

「仰せのままに」

\* \* \*

「なあ」

「……………」

「……………まだ怒ってるのかよ」

「……………」

「悪かったって」

「……………」

セックスにマンネリズムを覚えるような、全てを知り尽くした関係というわけではないけれど、『いつもと違う事』というのはいやほやり、それなりに精神の高揚を齎すものなのかもしれない。

四肢に施した拘束を、そのままに一度、解放してもう一度。行為がいつもより、激しかったのは事実だ。

そしてそれこそが、キッドの態度を頑なにさせ、ソウルの眉を情けなく下げさせていることの原因でもある。ソウ

ルにしても、明らかにやりすぎたと、思っているのだろう。背中越しに聞こえる声は、言葉を重ねる程にトーンを落とし弱々しくなっていく。

それもこれも、自分がふいと背を向けたまま無言を貫き通しているからだ。キッドは理解していたが、その態度を軟化させるつもりはさらさらなかった。

ソウルに背を向けたまま、顔を隠すようにしてシャツを引きあげる。

こうして身体を重ねる時、多少強引に事を進めることはあれど、ソウルは決して自分の意に沿わぬような行為を押しつけはしない。本当に嫌だと訴えればそれを容れるであろうということ、これまでの経験でキッドは十分に知っていた。

(……………)

そう、十分に分かっている。結局は自分がそう望んだからだと、分かっているからこそ、振り向けないのだ。

シャツに潜り込むようにして、少し背を丸める。頬がひどく熱かった。すっかりと冷えた頭が、先程までの痴態を、情慾に耽溺する自分の姿を、まざまざと思ひ起こさせて。

自身を律することもできないでいて、なにが秩序の番人であろうか。そのような自責の念もあった。だがそれだけではなく、結局今回もソウルのペースで物事を運ばれてしまったことに対して、少しばかり腹立たしい思いもある。いつものこと、と言ってしまえばそれまでなのだが。

「なあ」

「……………」

「キッド……………」

覇気のない声で名を呼ばれた、と思うと、こつんと肩のあたりに何か温かいものが触れた。

「……………くすぐりたいぞ」

額を押し当てられたのだろう。遠慮がちに回された腕と、さわさわと首筋のあたりに触れる白銀髪とが少しこそばゆくて、仕方なくといった調子でキッドは口を開いた。

「ゴメン」

「……………」

「ちよつと、調子乗った…………と、……………思う」

「……………ん」

小さく頷くと、ソウルの腕から心もち力が抜けるのがわ

かった。

非は彼にばかり、あるのではないと思いつながら、結局はその謝罪を容れ彼を赦すという形で、すべてを終息させてしまふ。

自分は少し、猜いのかもしれない。

ほっとしたような吐息を、背中越しに聞きながら思う。

「機嫌なおせよ」

「ん……」

軽く引き寄せられ、互いの身体がびたりと密着する。背に感じるソウルの体温に、確かな安堵を覚える。そういえば一度目は、碌に触れてきささえしなかった。そのことに、不安を覚えたのは確かだ。

……ならばこれぐらいは、許されても良いのだろう。言いつたように、そんな事を少し、考えた。

「シャワー浴びる？」

「う……ん」

どちらともとれるような、曖昧な返事を返したキッドに、どっちだよ、とソウルが小さく笑う。

こうしてただ抱き合っているだけで、満たされる。どうして、それだけではないいけないのか。そう疑問を覚えたときも確かに、あった。

けれど、今は。

身体を包む腕をそっとほどき、指を絡める。互いの境界を失うほどに激しく、求めあい、融けあつてゆくときの、気の遠くなるような熱さも。こうして穏やかな時間を過ごすときの、胸に満ちる快い温かさも。等しく与えるこの手が、不思議だと思う。ヒトとしての、生理学的欲求からくるもの、だけではなく。その先にあるもつと不確かなものに、触れてくるこの手が、好きだと思ふ。

「キッド」

「……」

交わる温度が心地よくて、まどろみに目を閉じる。

笑みの気配とともに、おやすみ、と小さく囁くソウルの声が聞こえて。

髪に触れた唇の感触を最後に、キッドは穏やかな眠りの淵へと落ちていった。

\* \* \*

その後、件の魔道具……ではなく、『玩具』はどうなったのか、というと、

「……………貴様、またこんな……………何故、持ってきた。捨てる、とあの時、言わなかったか」

「お前な、俺の都合も考えるよな？ 捨てるにしたって、ゴミ箱ポイって訳にいかねーし、って話してただろうが」  
「む、……………そうだな。ならば、原形を留めぬほどに解体すればいいのではないか」

「どうやって？」

「こう、お前の鎌刃で」

「人をリサイクルカッター扱いたア、いい度胸だ」

「……………冗談だ、怒るな」

「どうだか」

「しかし、……………なら、どうするかだ……………なんだ、その顔は。……………また何か、企んでいるのか？」

「企むとか人聞き悪いなおい……………そういや、まだ試していないヤツもあつたなど、……………ちよつと思っただけで」

「……………もうしないぞ」

「はいはい」

「ソウル」

「わーかってるって」

「……………、」

……………色々あつて、今でもまだ、死刑台邸のどこかにあるのです。

[END?]



[ ソウキドのえろ本 ]  
2013.04.02

ソウキドのえろ本製作委員会  
よねもり夕子

<http://shirayuki.saiin.net/~c-so/enter.html>

ONO

<http://blue.zero.jp/quadra/>

印刷：おん de まんが 様

■無断複写転載・  
ネットオークション禁止

colophon



SOUL EATER FAN BOOK Soul×Kid

2013.04.02 ソウキドのえろ本製作委員会